

教員採用汚職の全容解明と

再発防止・信頼回復についての申し入れ

大分県の教員採用や昇進をめぐる汚職事件が連日報道され、日本中に衝撃を与えています。多くの受験者は、子どもが好きで教育に人生をかけたい、そんな思いで教員の道を選んでいますが、ところがその入り口となる採用試験が、コネやカネによってゆがめられているとなれば、その先は言わずもがなです。

日本共産党議員団は、今回の事件を契機に、これまでのうみを出しきり今後は一切の不正をゆるさないための措置、ならびに公正な採用・昇進制度をつくるために、次のことを申し入れます。

まず第一に、不正の全容の解明が必要です。逮捕された関係者の供述から、口利きなどによる合格対象者に「○印」がつけられ、不正な加点や減点で合格者を入れ換えるという点数の改ざんの手口はかなり明らかになり、採用試験制度の改善もすすみつつあります。

しかし、疑惑を指摘された現職幹部が「今はコメントできない」という態度をとるなど、口利きや不正の実態の解明はきわめて不十分です。報道によると、口利きルートは「県教委・県幹部」「県教育委員」「県議・市議」「国会議員秘書」「市教委幹部」「教職者」「教職員組合幹部」など広範にわたっており、「依頼先の有力度が可否に影響した」との供述もあります。またある県議は「県教育長に頼んだことがある。議員活動としてみんなしている」などと発言しています。

地方のボスが口利きをし、そのことがさらにボス支配をつよめる、このような閉鎖的で前近代的な体質を温存しては、教育の理想を追求することはできません。このたびの郷司教育長の証言は、教員採用をめぐる不正が以前からあったという当事者としての勇気ある告発です。この際、別府市教育委員会として、口利きの実態調査をすべきです。

第二に、「先生もお金を使ったの？」と質問されるなど、保護者や子ども達にまで疑心暗鬼が広がっています。それだけに今回の事件を契機に、教育委員会が、不当な圧力に屈することなく、また文部科学省や県教委からの指示を実行するだけの上意下達の間接機関ではなく、教育環境の整備や子どものための専門的な助言を行なうという本来の任務に徹することが必要です。

そのために、日本共産党議員団として、別府市教育委員会がつねに教育現場の声に耳を傾け、職員会議の民主的運営、子どもや保護者らの学校運営への参画などをすすめ、教育委員会や学校を、子ども、保護者、教職員などに開かれた自由にものが言える場にするなど、信頼回復に全力をあげることを、強く求めます。

2008年7月15日

日本共産党別府市議会議員 平野 文活
同 野田 紀子
同 猿渡 久子

別府市教育委員会 教育長 郷司 義明 殿